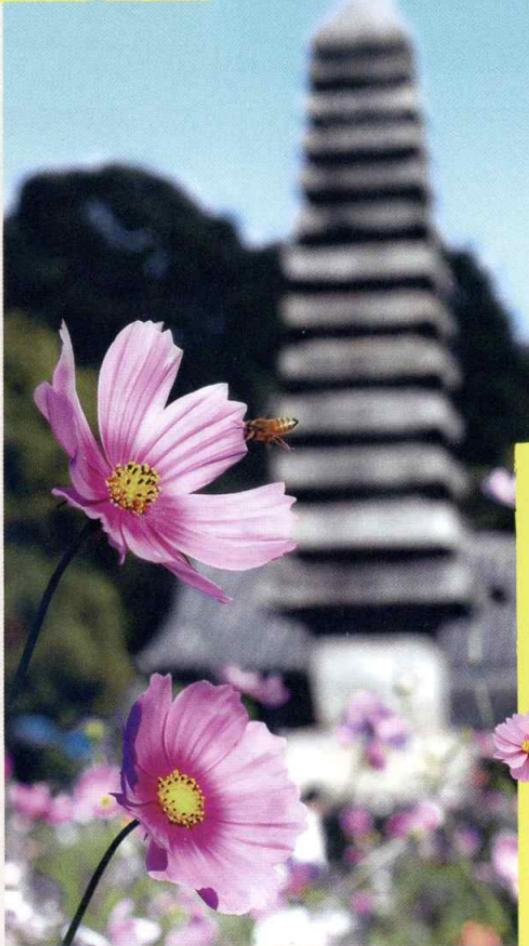
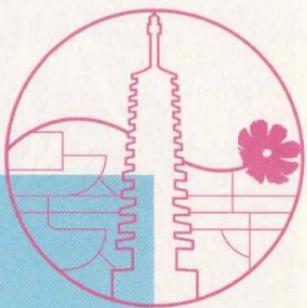


コスモス寺

般若寺

Hannyaji-temple

歴史ある花と仏の淨刹



日本最古の
コスモス名所



春



夏



紫陽花
夏口スモウ

秋



冬



水仙



「味酒　三輪の山　あおによし　奈良の
山　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積
もるまでに　つばらにも　見つつゆかむを
しばしばも　見放けむ山を　心なく雲の
隠さふべしや」（古里で見なれた三輪山が奈
良山を越える道で山の端に見え隠れする。
どうか雲よ隠さないでおくれ）と額田王が
詠つた、いにしえの奈良山を越えると、ころ、
奈良坂の古道にそつて立つ般若寺は、飛鳥
時代に高句麗の慧灌法師によつて開かれ
た。都が奈良に遷つて天平七年（七三五年）、
聖武天皇が平城京の鬼門を守るために「大般
若經」を基壇に納め卒塔婆を建てられたの
が寺名の起りとされる。そして平安の頃
には学問寺として千人の学僧を集めて崇え
たが、後承四年（一一八〇年）平家の南都攻
めにあい伽藍は灰燼に帰した。

鎌倉時代に入つて廃墟の中から、十三重
石宝塔をはじめ七堂伽藍の再建が行なわれ
寺觀は旧に復した。なかでも金堂本尊には
西大寺教尊上人により丈六の文殊菩薩がま
し候。」

つられ信仰の中心となつた。上人は菩薩の
教えである利他の行（自己を高め他のため
にはたらく）を実践し、弟子の忍性、良慧た
ちと病者や貧者の救濟に力をつくされた。
その尊い慈善活動は福祉の先駆として歴史
に名高い。般若寺はその後、室町戦国の兵
火、江戸の復興、明治の廢仏毀釈と榮枯盛衰
を経ながらも、真言律宗の法灯をかかげ今
にいたつている。また当寺は「平家物語」や
「太平記」「宮本武蔵」など歴史文学の舞台と
しても世に知られる。そして四季折々の花
は古寺の庭に彩りと風情を添えていく。
興正菩薩寂尊の御教誡

「修行の用意は事多くそらうらえども、衆苦を
恐れず一すじに、一切衆生を済度せんため
に仏にならんと思ひ候うを上求心と申す
也。怨親平等に哀れむ心深きを下化衆生と
申し候。この二つの心を發してゆるぐ事な
くて、縁にふれ境にしたがいて、いかにもし
て妄念をやめんとはげみ候を仏道修行と申

縁起



八字文殊菩薩騎獅像

はちじもんじゅばさつきしそう

鎌倉時代

般若寺御本尊。文殊師利は般若経を説いた智慧の菩薩。本像は元亨四年（一二三二四年）、後醍醐天皇の御願成就のため、文觀上人が発願し大仏師康俊・康成、施主藤原（伊賀）兼光らとともに造願した。もと經藏の秘仏本尊であつたが現本堂再建により御開扉された。

「辿り来て慈眼涼しき文殊かな」 東子

重文



重文

一切經藏

いつさいきょうぞう

鎌倉時代



元版一切経を収納する経蔵。内部は三方に経棚があり、天井は垂木が見える化粧屋根裏となつていて。本尊十一面觀音像は室町時代、椿井仏師尊弘作、旧超昇寺脇仏。『太平記』で名高い大塔宮護良親王が唐櫃に隠れ危難をのがれられたのはこの経蔵であつた。

「経櫃のかなしきえにし露の堂」 敏子

十三重石宝塔

じゅうさんじゅうせきぼうとう

鎌倉時代

ろつもん

重文



塔は卒塔婆（梵・スツーパ）の略、内部に釈迦牟尼仏陀の舍利をまつる。聖武天皇御創建を伝えるが、現在の塔は観良上人が勧進し宋人石工伊行末、行吉らの手で建長五年（一二五三年）頃再建された。五丈（一四、二m）の高さを持つ日本を代表する石塔である。塔身に膨らみをも

たせ、初重笠石を大きくして安定感を見せる。大きな基壇は授戒式を行つたと推定される。莊重な塔姿は後世の層塔の模範となつた。昭和三九年大修理の際、塔内より多数の納入宝物が発見される。四方仏には東南西北に薬師、釈迦、阿彌陀、弥勒の顯教四仏がある。



▶ 顯教四仏 (けんきょうしふつ)

南都佛教(顯教)独特の四方四仏。弥勒は下生の如来として表現される。



▶ 蓼股 (かえるまた)

上部を支える部材。ここではまだ装飾性は少なく、実用的でシンプルな美を見せる。

倉再興伽藍（文永四年）廻廊西門。正門は南大門、中大門であつたが戦国の兵火で失われ、寺中を貫く京街道に面した楼門のみが保存された。建築様式は和様に天竺様（大仏様）の意匠が取り入れられ、美しく軽快な屋根のそりを見せる。楼門遺構としては日本最古の作例。「門に入るや東風吹きぬける般若寺」莞人

国宝



鎌倉時代

ろつもん

重文



宋人石工伊行吉が弘長元年（一二六一年）に父伊行末の壱周忌にあたり、父の供養のために建立。もと寺の南方、般若野と呼ぶ墓地の入り口にあつたが廃仏毀釈で破壊され明治二六年、境内に移転再建される。下部に二六四文字の銘文があり、東大寺再建にたずさわった宋人石工の事績が知られる貴重な史料。お能の謡曲『笠塔婆』の題材。

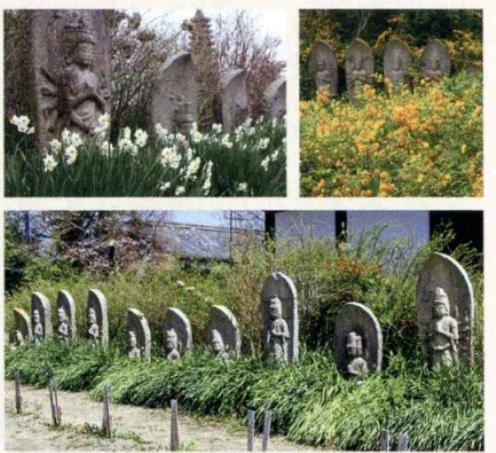
笠塔婆

鎌倉時代

元禄一五年（一七〇二年）、山城国北稲八間の寺島氏が病氣平癒の御礼に奉納。

観音石仏

西國三十三所
江戸時代



県文化歴



戦国時代、旧金堂が焼けたあと寛文七年（一六六七年）、妙寂院高任・妙光院高栄が勧進して再建。屋根は入母屋造り、外陣は吹き放しとする古様の形式を残す。御詠歌「み仏のめぐみもふかき般若台ももの願いをかなえたまわむ」

本堂

江戸時代

別名、文殊型ともいう名灯籠。豪華な蓮台、宝珠など各部が装飾性に富む。火袋には唐獅子、牡丹、鳳凰の彫刻がみられる。最古の作は東京椿山莊に現存。
「寂静や古都の月冴ゆる般若寺」 水嶺

般若寺型石灯籠

鎌倉時代

